ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

ソンコ de ソンコ

Vol.144

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で
執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

今月のテーマ

カンナ カムイ(雷神)

村木美幸(アイヌ民族文化財団副理事長)

天上にいる神、カンナ カムイ(上方の神)の名を持つ雷のカムイ(神)。カムイが天上の国に住んでいるのは知られていますが、なぜ雷のカムイだけこの名で呼ばれるんでしょう?平取(ぴらとり)の川上(かわかみ)まつ子さんの話に「…ウフラ カント(霧の天)の六つの天を私は突き抜けて、ノチウ カント(星の天)の六つの天を私は突き抜けて…シニシカント(雲の天)の六つの天、リクン カント(高い所の天)に…見るとカンナ カムイの村に…」の話が。アイヌ語の「六」には「たくさん」という意味もあるので、天上のたくさんのカント(天)を突き抜け、その最上のカントに雷のカムイの村があるというもの。カンナ カムイ(天上の神)の名で呼ばれる所以(ゆえん)でしょうか?

国立アイヌ民族博物館では、「雷は人間がカムイへの感謝を忘れないように定期的に訪れるカムイ」と紹介しています。人間の行いを取り締まる役割を持つ雷のカムイは、物語の中でカネシンタ(黄金のシンタ)にのって移動します。シンタの吊り紐を引き締めたり、緩めたりすることで速度を調整し、シンタの前後を叩くことで雷鳴を響かせ、稲光を走らせます。雷のカムイは、強い力をもつ上に気性が激しいことから、機嫌を損ねると、落雷で村をも焼きつくすと恐れられているので、遠くに雷の音が聞こえたら、人間たちは家の中でオリパク(行儀よくかしこまる)してカムイが通り過ぎるのをじっと待たなければならないといいます。

カンナ カムイは稲光が走るその姿から龍神とも呼ばれます。旭川では「…忘れる程の長時間、人に見られずに過ごした蛇は龍になり、天空に上って雷神になる…。」というお話も。カムイは、カムイの国では人間と同じ姿をしていて、身に付ける着物はそれぞれのカムイの特徴を表すトレードマークとなる文様が入っているといいます。例えば、水のカムイはしずく文様、疱瘡神(ほうそうしん)は水玉文様というように…。雷のカムイは稲光か角や鱗が表現された龍の形かと思いきや、雷は雹(ひょう)を降らせるから、あられ文様の着物を着ているとのこと。なんだか可愛いですよね。

イラスト/山丸ケニ

白老では、クッタラ湖のある山、クッタルシ ヌプリをカンナ カムイ エワキ(雷神が鎮座している所)と呼び、古くから祈りの対象としてきたといいます。他にも幌尻(ぽろしり)岳(だけ)や洞爺(とうや)湖(こ)をはじめ各地に雷のカムイの伝承が残されていますので、調べてみるのも楽しいですよ。 Ⓙ

次回のテーマは「プヤラ(窓)」
本田優子(札幌大学教授)が担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間
JR白老駅から徒歩約10分

ウポポイPRキャラクター
「トゥレッポん」

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団副理事長。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■山丸ケニ(やまるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。